香川大学教育学部

附属坂出学園だより

第38号　2011.3

県養護学校・駅伝大会

たすきリレー

目　次

・今，学園では
　幼稚園　p 2
　小学校　p 3
　特別支援学校　p 4・5
　中学校　p 6
　特別支援教室「すばる」　p 7
・ＰＴＡ活動（松韻会・親和会）　p 8・9
・坂出学園１～３月のあゆみ　p 10

研究主題　協同への歩みを探る

～保育の構想と実践を考える～

１月28日（金），第56回附属幼稚園研究発表会を開催しました。県内外より250名の参会者をお招きし，盛会に終えることができました。

附属幼稚園では，昨年度より研究テーマを「協同への歩みを探る」とし，「幼児が友だちと共通の目的を見い出し，協力・工夫して遊ぶようになるための指導の在り方」について検討しています。その際，本園の発達観である３つの関係づくり･･･「ものやこと」へ興味関心の深まりの中で，「人」との関係も豊かに育まれ，同時に「自分」を振り返りながら集団の中で自己発揮する姿に至る･･･の考えのもと研究を進めています。昨年度は，３歳から６歳における＜協同への育ちの過程＞を整理してまとめましたが，今年度は，この育ちの見通した上で，それぞれの時期の今の充実を図るための，『保育の構想と実践』『＜協同への育ちの過程＞そのものの見直し』について研究を進めました。また，小学校を間近に控えた接続期の在り方についても検討しました。

＜なわとび遊び＞

先生との関係を心の拠り所としていた子どもたちも，友達を嬉しい存在と感じるようになりました。友達が楽しく跳べるように，縄の揺らせ方を考えています。
―互いの思いが共有できるよう，じっくりと遊ぶ場の保証，様々な楽しさを味わえる遊びの提供を大切にします―

＜一つの目的に向かって＞

夕涼み会で力を合わせる楽しさを経験した子どもたちは，ハロウィンパーティーに向けて，主体的に自分の考えを伝え合ったり，声をかけ合ったりしながら進めます。―自分たちの力で達成した充実感を味わえるような活動と支援を大切にします―

＜協同への育ちの過程　（2010年度版）＞

赤字は今年度見直し，修正した箇所

	Ⅰ期　初めての集団の中で様々な環境に			Ⅱ期　遊びが充実し自己を発揮する時期		Ⅲ期　人間関係が深まり学び合いが可能となる時期 ＜接続期＞	
人	**私と先生** ・先生を心の拠り所として安心する。 ・友達を感じる。	**私と先生と友達** ・先生や友達とのやりとりを楽しむ。 ・友達と場やイメージを共有する。	・気の合う友達と共感したり葛藤したりする。 ・いろいろな友達とかかわっていこうとしたり，相手の思いを感じたりする。	**友達と私** ・仲間と心を合わせて遊ぶことを楽しむ。 ・他者の持ち味を認め合う。	**仲間と私** ・同じ目的をもち，興味のあるところでかかわったり，役割を意識してかかわったりすることを通して，協力工夫して進める楽しさを知る。	**仲間の中の私** ・交流活動を通して，小学生の姿に憧れや魅力を感じる。 ・集団での伝え合いを通して友達の表現のおもしろさやその人なりのよさを感じる。	
ものやこと	**触れる・親しむ** ・心の拠り所となるものやことが見つかり，安心して遊ぶ。	**興味・関心** ・したい遊びを見つけ，心ゆくまで遊ぶ。	**試行錯誤・工夫** ・いろいろな遊びを楽しみ，ものやことに親しむ。 ・遊びを工夫する。	・繰り返し遊ぶ中で遊びの見通しをもつ。 ・楽しく遊ぶための多様な方法を考えたり取り入れたりしていく。	**追究・創造** ・これまでの経験を生かしたり，新しいやり方を生みだしたりして遊びや生活を進める。	・交流活動を通して新しいことや難しいことに興味・関心をもち，かかわろうとする。 ・言葉や数の世界への関心が高まり，進んで使っていこうとする。	
自分	**安心** ・安心を感じて少しずつ自分を出し始める。	**自己発揮** ・自分からかかわっていこうとする。	**葛藤・振り返り** ・自分の存在を感じ，はりきって自分を出す。	・友達と自分の思いの狭間でたじろぎ，振り返る。	**集団の中での自己発揮** ・集団で取り組む充実感を味わったり，その中で自分らしさを発揮したりする楽しさを味わう。	・大きな自信を感じ，自分を誇らしく思う。	

さらには，東京家政大学家政学部教授の戸田雅美先生をお招きして，「協同する体験における自己目的の重要性」についてご講演をいただきました。「協同」は５歳児から始まるわけではなく，５歳児になるまでの経験の積み重ねが大切であること，また，真剣に遊んでいる中で，幼児は自然と「協同」していくこと等について，具体的な事例からお話いただきました。ご参会の先生方からも，とても分かりやすく，勉強になる内容であったと大好評でした。

知の更新をめざした「思考力」の育成（2年次）

－言語活動を充実し，思考様式を共有化する授業づくり－

1月27日（木），28日（金）の両日，第94回教育研究発表会を開催いたしました。北は北海道，南は宮崎県と，県内外よりのべ1300名を上回る先生方にご参会いただき，盛会裏に終えることができました。

本年度は，「思考力」を育成するために，個の「実感・納得」と集団での「承認・合意」をめざした2つの言語活動を，研究授業や協議会等を通して提案いたしました。

以下に，一部ではありますが，研究会での授業の様子を紹介いたします。

●●● 研究授業 ●●●

5年　算数科「正多角形について調べよう」

白川（しらかわ）　章弘（あきひろ）

【円の中心の見つけ方を話し合う】

子どもたちは，「三角形と四角形は辺の数が違うから，それぞれ別の図形である」と捉えている段階です。本実践では，多角形の定義や性質に照らして考察することにより，「正多角形には，円の内側にぴったり入る性質がある」と共通点がある仲間として捉え直せる「思考力」の育成をめざしました。

本時は，前時に調べた辺の数が偶数の正多角形だけでなく，辺の数が奇数の正多角形も「円の内側にぴったり入る性質がある」ことを調べました。その際，意図的に「半分に折る」ことができない正三角形を配布しました。すると子どもたちは，辺の数が偶数の正多角形を2回半分に折り，「2本の折り目が重なる点が円の中心になる」ことを見つけた前時の経験を基に，円の中心の見つけ方を話し合いました。その中で出された，「半分に折った折り目と同じ直線がかけそうだ。」「折り目と同じ直線は，頂点と，向かい合う辺の真ん中を結べば引ける。」といった反応から，「半分に折らなくても，折り目と同じ直線を2本引けば，円の中心が見つかりそうだ。」と，思考様式「半分にして見る」を見出していきました（**集団吟味**）。その後，実際に正三角形や正五角形が「円の内側にぴったり入る」ことを確かめました。子どもたちからは，「円の中心と重なる点を見つけるには，半分に折ってできる折り目と同じ直線を2本引くとよい。」と，思考様式「半分にして見る」のよさに気付く言葉が聞かれました（**体験の言語化**）。

【円の内側にぴったり入ること確かめる】

6年　体育科（保健）「病気の予防　―今，そして将来のために―」

大東（おおひがし）　ひとみ

【吸った理由を話し合う】

子どもたちは，「たばこやお酒は体に悪く，病気の原因になりやすい。だから，吸ったり飲んだりしたくない。」と思っています。そのため，たばこやお酒を勧められても，簡単に断ることができると考えています。しかし，実際には，好奇心や周りの人からの誘い，ストレスなどがきっかけで喫煙や飲酒を開始するケースが多く，喫煙や飲酒をしないためには，雰囲気に流されない強い意志をもって行動することが大切です。

そこで，本時は，たばこを吸い始めたことを後悔しているAさんの事例を基に，吸ってしまったきっかけを話し合いました。「先輩に勧められたから断れなかったのでは。」「失恋して気晴らしに吸ったのでは。」といった理由から，「場の状況」や「心の状態」が関係していることに気付いていきました（**集団吟味**）。さらに，ロールプレイによって断ることの難しさを体験する場を設定することで，「たばこを勧められると断り切れないのは，その時の『場の状況』や『心の状態』が大きく影響している。断るときには誘いに負けない強い気持ちが大切だ。」と，断る難しさを話し合いました（**体験の言語化**）。

このような2つの言語活動を通して，「場の状況」や「心の状態」から吸ってしまったきっかけを考えるという思考様式のよさを学習集団で共有化していきました。

【断る難しさを体験する】

ICT活用の取り組み

本校では，学校生活の様々な場面でICTを活用しています。ICT とは，information and communication（s）technologies（情報通信技術）の略です。知的障害のある本校の子どもたちは，ICT機器を使うことによって，情報を受け取ったり発信したりする際，コミュニケーションや生活がしやすくなります。今回は各学部の取り組みを紹介します。

小学部

小学部では校外学習に行く前の学習として，タッチパネル式のテレビなど情報機器を使った授業を行っています。今までもプレゼンテーションソフトなどを使った授業を行っていましたが，児童自身が画面にタッチをすることで画面が変わったり，画面に直接書き込めたりすることで，さらに意欲的に授業に参加する姿が見られるようになりました。

また，ことば・かずなどの学習の際にも，やり取りを学習するための支援ツールとしてiPadを利用して児童の伝えたい気持ちを高め，学習意欲につなげています。

休み時間については，パソコンのインターネットを利用し，好きな動画を見る児童や，iPadを利用してお絵かきを楽しむ児童もおり，自分なりの楽しみを見つけて過ごすことができています。

中学部

中学部では，ICT機器（ipod-touch）に様々なソフトを入れて，子どもたちの生活や学習に生かしています。写真１は，給食後の５分間の歯磨きを支援するソフトです。タイマーの作動と同時に，画面の中の歯ブラシが移動し磨く場所を教えてくれます。写真２のように，VOCA（音声出力装置）としても使えます。必要と思われることばを絵とともに入れておき，生徒が選んで押すと選んだ絵が写真３のように大きくなって，あらかじめ録音しておいた音声（「手伝ってください」）が再生され，相手に伝えます。

他には，ひらがなを選んで文を作り，文を読み上げて相手に伝えることができるソフトや，漢字学習ソフトもあり，自主的に勉強する生徒もいます。今後も，様々なソフトを活用し，生徒の学習や生活の向上を支援していきたいと考えています。

写真１

写真２

写真３

高等部

高等部では，卒業後，通勤手段や生活面で原動機付き自転車が必要と思われる生徒が，個別に免許取得のための学習に取り組んでいます。以前は，教則の付いた問題集を利用することが多かったのですが，最近では，I pod touchを利用しています。

I pod touchを利用することの利点としては，問題が１問ずつ出題されるため，生徒が根気よく，続けて取り組みやすいということがあげられます。本の問題集の場合，一度にたくさんの問題が載っているので，やり終えるまでがたいへんといったこともあるのですが，そういった部分を補ってくれます。機器を操作しての学習という点でも，生徒の興味・関心を高めているようです。

今後も，学習内容によっては，今後もICT機器を利用することで，学習効果を上げていきたいと思います。

広がるICT活用の可能性

香川大学教育学部特別支援講座　**坂　井　　聡**

特別支援教育においてICTの活用の可能性が広がってきている。文部科学省が公表した「教育の情報化に関する手引き」では，その第９章で「特別支援教育における教育の情報化」という項目を作り，特別支援教育において，ICTをどのように取り上げていくのかについての方向性が記載されている。この記述のなかには，障害観に関わる注目すべき点がある。それは，眼鏡や松葉づえを例に出しているという点である。

眼鏡と松葉杖を例に出しているということは，眼鏡や松葉杖と同様，困っていることを解決するためにICT機器を利用する発想がいるということを示している。そこには，特別な支援を必要とする子どもたちが，障害そのものを訓練によって克服改善するのではなく，ICT機器という支援ツールを使うことで，生活上の困難や学習上の困難を解決してみたらどうだろういうメッセージを読み取ることができる。そして，これは，障害のある人への新しい能力観の提案でもある。

眼鏡を例にして考えてみよう。裸眼では見えないために，生活上困っている人は，眼鏡をかけ困っていることを解決している。眼鏡がその人の視力そのものを克服し改善しているのではない。眼鏡を外したら，やはり，その人の本来の視力に戻ってしまうからである。ここで重要なのは，「眼鏡をかけているから，あなたの本来の力ではない。」と評価する人は誰もいないという点である。評価されるのは，眼鏡という支援ツールを使った状態での力なのである。

ICTの導入によって引き出された力も，その状態での力で評価できないだろうか。知的障害がある場合，障害を克服することはできない。視力と同じである。視力を補うために眼鏡をかけるように，計算ができないのであれば電卓を活用したらどうなのだろうか。漢字を書くことができなければ，ワープロを使ったらどうなのだろうかと考えてみるということなのである。度に応じたICTの導入により，障害による生活上の困難さを克服できるのではないかと考えるのである。これが新しい能力観の提案になるのである。

附属特別支援学校の取り組みで新しい能力観を確立することができれば，困っている多くの子どもたちを救うことができるに違いない。その取組は，大いに期待されているのである。

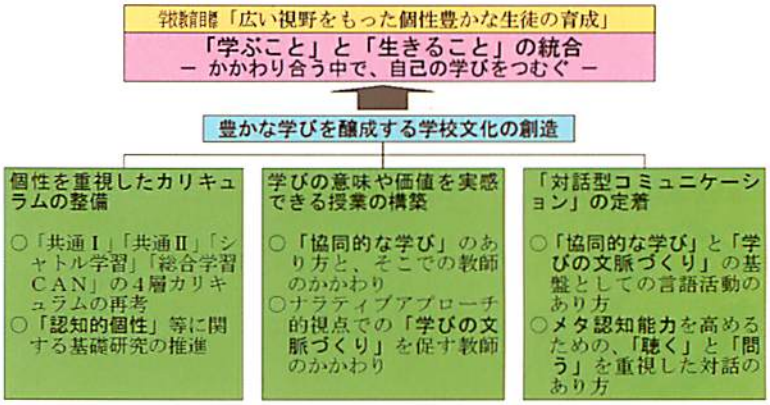
「学ぶこと」と「生きること」の統合
―かかわり合う中で，自己の学びをつむぐ―

「対話型コミュニケーション」の定着に向けて

生徒同士がつながり，豊かな学びが築かれるための交流のあり方とそこでの教師のかかわり方（協同的な学びの構築），学びの文脈づくりを促す教師のかかわり方（個の学びの再文脈化），を大きな柱として実践研究を進めています。

そして，そのための基盤になるものとして「対話型コミュニケーション」の定着に取り組んでいます。

研究構想図



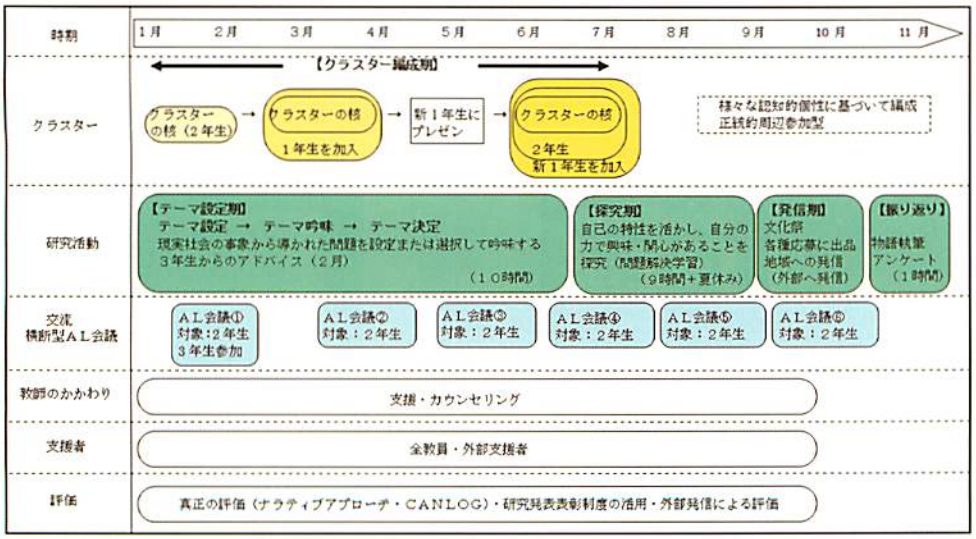
学校生活での様々なコミュニケーション活動の質が，学習文化的風土の豊かさと深くかかわっているという認識で，多角的・多面的なアプローチでコミュニケーション活動の改善を試みようとしています。　中でも，「聴く」ことと「問う」ことの重要性に着目し，各教科の授業においてそれを重視した授業構築を目指して実践を重ねています。

【違う考えの仲間との質疑】

総合学習「CAN」

興味・関心が同じ異学年合同の小グループ（クラスター）による研究

「ＣＡＮ」の流れ［全20時間］



総合学習「CAN」は，現実社会を題材とし，実際の研究者と同じように研究を進めていく「本物の学習」です。

２年生がテーマ案を考え，年度をまたいで徐々に仲間を加えながら11月まで研究を進め，成果を発信します。

研究を進めていく中で，教科学習やその他の学びとのつながり，自分の個性の見つめ直しなど，さまざまな気づきが生まれることを期待しています。

第3回 香川大学教育学部 特別支援教育研究大会 開催される!!

平成23年３月５日（土）にサンポートホール高松において，第３回香川大学教育学部特別支援教育研究大会を開催いたしました。本大会では，特別支援教室すばるの８年間の取り組みをまとめ，発表しました。

「特別支援教育の充実：発達障害児を対象とした根拠のある指導と評価をともなう支援」の大会テーマのもとに，シンポジウムや分科会・特別講演をおこないましたところ，全国より1,000名の保護者・先生方・関係者の皆様の参加を得ることができ，大盛況の内に終わることができました。

以下に，各会場の写真を掲載しますのでご覧ください。

大ホールにて，開会行事を実施しました。一井学長先生より，ご挨拶を頂いています。

続いてシンポジウムをおこないました。シンポジストの先生方（写真左）とコメンテーターの文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育調査官　石塚謙二様とコーディネーターの香川大学教育学部特別支援教育講座教授，香川大学教育学部特別支援教室室長の武藏博文先生です。

午後は５つの分科会（認知機能のアセスメント：教科指導：社会性育成支援：保護者支援：担任支援），及び東京学芸大学名誉教授・日本ＬＤ学会理事長　上野一彦先生による「特別支援教育の充実に向けての課題」の特別講演をおこないました。大会の終了後のアンケートには，大変充実した大会であり，一日が短く感じられた大会でしたと好評を頂きました。

松韻会だより

幼稚園より

エコライフ活動

２月２日，エコ活動の一環として保護者の皆様からご提供いただいた，小学校と幼稚園の制服・体操服などを幼稚園のリズム室で販売しました。当日は，小学校入学を控えた青組保護者の方や在園児の保護者の方が大勢来られて，必要なものを買って帰られました。まだまだ十分使用できるものをご提供いただいており，皆さんとても喜んでくださいました。

このエコ活動の収益金で，今年度は図書の購入を行うなど，子どもたちに有益な活動となっておりますので，今後も引き続きご協力をお願いいたします。

親子ミニ運動会

９月の合同運動会とは別に，幼稚園だけの親子ミニ運動会を２月に行っています。今年は２月16日に，例年にない雪の影響で園庭がぬかるんだ中での開催となりました。しかし，保護者の方のご協力でぬかるんだ園庭があっという間に整備され，子どもたちは寒さや少しくらいの泥はねも気にせずに，おうちの方と一緒に思い切り身体を動かし，各チームに分かれての親子競技や玉入れ，綱引きを楽しむことができました。

大好きなお父さんお母さんと競技に目を輝かせ，体中で楽しさを表す子どもたちの姿は，保護者にとっても我が子の成長を感じるいい機会であったと思います。

小学校より

光輝里フェスティバル

2010年11月20日（土）～2011年１月10日（祝）まで坂出駅前市民広場などで「さかいで光輝里フェスティバル」が開催されました。会場には，11月の土曜クラブで児童が手作りした作品が展示されました。夜になると児童たちの作品がライトアップされ，昼間とは違った表情の作品が会場を訪れた人たちの目を引いていました。

お話ランチボックス

毎週水曜日のお昼休みに，お話ランチボックス（有志の母親による児童への本の読み聞かせ）が開催されています。

12月には大型スクリーンに映像を映したり，ピアノなどを使ったりしながら「お楽しみ会」を行いました。当日は約250名の児童が参加して，楽しいひと時を過ごすことができました。帰りには，保護者の皆さまからいただいた鉛筆を参加した児童全員にプレゼントしました。

「お話ランチボックス」に参加していただける「おはなしママーず」を募集しています。ご興味のある方は，毎週水曜日の昼休みに開催している「お話ランチボックス」に是非遊びに来てください。

中学校より

若い音楽家によるプチコンサート

12月11日，中学校松韻会主催でプチコンサートを催しました。出演してくださったのは，香川県出身で東京芸大を卒業されたばかりのうさぎ年生まれの「うさぎの会」のフレッシュなみなさん。その名の通りの愛らしく優しい真摯な演奏に，会場は温かい空気で包まれました。

実はこの日はオープンスクール&中学入試説明会で，保護者家族だけでなく，附坂中進学を考えている小学生のご家族も多数来校されていました。生徒たちは，大勢の来校者と朝からの参観授業と平和を考える親子セミナーで緊張続き。「うさぎの会」のみなさんの演奏を聴きほっこりと心をほぐすと同時に，平和な世の中の有難さや努力して夢を追いかけるすばらしさを感じてくれたのではないかと思います。

参加してくださった皆様，ご助力いただいた皆様，どうもありがとうございました。

特別支援学校より

親和会

全国のPTA活動に参加して

親和会会長　加賀　実

平成22年度は，10月１・２日と全附Ｐ連研修会に参加し，全国のPTA活動や附属校ならではの特色等，いろいろと勉強させていただきました。特別支援教育の部会では，「インクルーシブ教育」について様々な視点からの考え方を知ることができました。また，松韻会の皆様とも短い時間でしたがご一緒し，校種を超えて交流することができました。（会長はじめ役員の皆様ありがとうございました）

また，平成22年12月４・５日の日程で，全国特別支援学校知的障害教育校PTA連合会の連絡協議会に参加させていただきました。改正されたばかりの障害者自立支援法や，特別支援学校の現状と問題点等を，厚生労働省と文部科学省の職員の方から直接うかがうことができ，ここでも「インクルーシブ教育」について議論がなされました。

（※「インクルーシブ教育」は耳慣れない言葉ですが，国の中央教育審議会で検討されている，「障害があっても，民族が違っても，違いによって分離も排除もせず，様々な違いをもった子どもたちが，同じ空間で学ぶ教育」と言われています。その為には，子どもたちのニーズに合わせた様々な支援が必要になり，人材や施設等も必要になります。今後導入されれば，子どもたちの教育環境が変わってしまうかもしれません）

全国的な会合に参加して，PTAの思いに場所や学校の垣根は無いことや，各地のPTAは子どもたちのためにできることを模索しているのだ！という事を再認識しました。われわれも，子どもたちのためにPTAとして，できる事からしていかなければと思いました。

坂出学園１月～３月のあゆみ

中学校

ＳＰＰ（サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト）フィールドワーク

香川大学博物館との交流学習として，２月１日，１年生を対象にＳＰＰフィールドワークが行われました。中学生の科学への関心を高めようとするプロジェクトで，香川大学博物館長の丹羽先生ほか工学部，経済学部の先生方の引率で，金山周辺に出かけました。１人１人の興味関心に従って，植物班，昆虫班，地質班，考古班の四つに分かれ，身近な里山の自然や生物について様々な調査を行い，充実した時間を過ごしました。

送別芸能祭

３月10日（木）に恒例の送別芸能際が行われました。今年は１年生が「りんごの木」，２年生が「いつか，僕をさがして」と題した劇でした。役者，大道具，小道具，衣装，照明，音響まで手作りの演劇に，３年生や保護者の方から惜しみない拍手が送られました。

小学校

３学期のあゆみ

市議会体験＆選挙出前授業

１月17日，６年社会科の学習で，市の仕事を調べに行きました。私たちの願いを実現したり，生活をよりよくしたりするために，いろいろな課があり，そこでどのような仕事をしているかをグループ毎に分かれて見学しました。市議会が行われている会議場では，市長さんや教育長さんに質問し答弁していただけました。

２月16日には，県と市の選挙管理委員会の方に体育館で出前授業をしてもらいました。そこでは，実際に投票箱に投票する体験の場を設けたり，選挙と願いの実現のつながりを分かり易く説明したりしてくださりました。

引き続き，このような本物に触れたり体験したりして「分かる」を実感できる学習を大切にしてまいります。

特別支援学校

公開授業研究会

２月１日，本校の研究授業を外部に公開して，授業研究会を行いました。小学部「ことば・かず」，中学部「パワーアップ」，高等部「職業」の授業をそれぞれ参観していただきました。新しい研究主題になって初めての外部公開で，「ポジティブな人間関係をはぐくむ視点での授業づくり」について提案することができました。

授業前には，改善点を含めた授業説明を，授業後には，参観者を交えて授業討議を行いました。保育所，幼稚園，小学校，中学校，県立特別支援学校の教員，大学生など多方面の方々から貴重なご意見をいただきました。また，

研究協力者である香川大学特別支援教育講座の先生方や，外部指導者からもご指導・ご助言をいただきました。来年度の第16回研究発表会に向けて，さらに研究を深めてまいります。

幼稚園

こま遊び大好き～１月から２月～

黄組は，ひねりごま。皆で輪になって見たり，どちらが長く回るか競争したりすることを楽しんでいます。回すと，こまにぬった色が変わることを大発見した黄組さん！色の塗り方を様々に試したり，小さく三角に切った紙を芯に通してこまの上に載せて回すことで，紙の形が丸く見えることを楽しんだりしています。

赤組は，糸引きごま。いろいろなところで回せるようになり，次はなんと，自分たちでこまを回す場所「こまスタジアム」を作りはじめました。友達と話し合っていろいろな「こまスタジアム」を作ること，スタジアムでこまが思わぬ動き方をすること等が楽しい様子です。

青組は，難しい鉄心ごま。一人一人が「紐を自分で回すこと」「１日１回は回すこと」「長く回る競争をして勝つこと」などの目当てをもって挑戦しています。

青組が鉄心ごまに挑戦する姿は，黄組や赤組の「青組さんのように・・・」という憧れの気持ちを育んでいます。

編集後記

桜の花満開の中でスタートした平成22年度も終わろうとしています。蕾がふくらみ，新しい春がそこまでといった今日この頃です。

子どもたちの素晴らしい活躍があり，それぞれ健やかに成長できた１年であったと思います。卒園・卒業される皆様，おめでとうございます。附属学校園で学んだことを今後の糧にし，更に新しい場で活躍されることをお祈り申し上げます。また，新しい学年を迎える皆様には，今年度学んだことをもとに，更に成長されることを期待しております。

関係の皆様方，本年度も附属学校園への，厚いご支援ご協力に深く感謝申し上げます。来年度も引き続きよろしくお願い申し上げます。

発行年月日：2011年３月16日
発行事務局：香川大学教育学部附属坂出小学校内

佐藤　美芽（附属幼稚園）
宮野　真也　三宅　永哲（附属坂出小学校）
寺岡　英郎　小林　理昭（附属坂出中学校）
武田　光弘　木下　博美（附属特別支援学校）